『注文の多い料理店』

作　宮沢賢治

構成・脚色：studio_o3

二人の若い紳士が、ぴか／／する鉄砲をかついで、白熊(しろくま)のやうな犬を二疋(ひき)つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさ／／したとこを、あるいてをりました。

「こゝらの山は怪(け)しからんね。鳥も獣も一疋も居やがらん。なんでも構はないから、早くタンタアーンと、やつて見たいもんだなあ。」

「鹿(しか)の黄いろな横つ腹なんぞに、二三発お見舞まうしたら、ずゐぶん痛快だらうねえ。くる／／まはつて、それからどたつと倒れるだらうねえ。」

すると、あんまり山が物凄(ものすご)いので、その白熊のやうな犬が、二疋いつしよにめまひを起して、しばらく吠(うな)つて、それから泡を吐いて死んでしまひました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じつと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云ひました。

「ぼくはもう戻らうとおもふ。」

「ぼくもちやうど寒くはなつたし腹は空すいてきたし戻らうとおもふ」

ところがどうも困つたことは、どつちへ行けば戻れるのか、いつかう見当がつかなくなつてゐました。

風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。

「どうも腹が空いた。」

「ぼくもさうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

「あゝ困つたなあ、何かたべたいなあ。」
その時、ざわざわ鳴るすゝきの中で、ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。
そして玄関には【西洋料理店　山猫軒】といふ札がでてゐました。
「君、ちやうどいゝ。入らうぢやないか」
「おや、こんなとこにをかしいね。しかしとにかく何か食事ができるんだらう。はいらうぢやないか」
玄関は白い瀬戸の煉瓦（れんぐわ）で組んで、実に立派なもんです。
そして硝子（がらす）の開き戸がたつて、そこに金文字でかう書いてありました。
「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」
「こいつはどうだ、けふ一日なんぎしたけれど、こんどはこんないゝこともある」
二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になつてゐました。その硝子戸の裏側には、金文字でかうなつてゐました。
「ことに肥（ふと）つたお方や若いお方は、大歓迎いたします」
「君、ぼくらは大歓迎にあたつてゐるのだ。」
「ぼくらは両方兼ねてるから」
ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉とがありました。
「どうも変な家（うち）だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだらう。」
「寒いとこや山の中はみんなかうさ。」
扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でかう書いてありました。
「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」
「これはぜんたいどういふんだ。」ひとりの紳士は顔をしかめました。
「うん、これはきつと注文があまり多くて支度（したく）が手間取るけれども

ごめん下さいと斯(か)ういふことだ。」

「さうだらう。早くどこか室(へや)の中にはひりたいもんだな。」

「そしてテーブルに座りたいもんだな。」

二人は云ひながら、その扉をあけました。

ところがどうもうるさいことは、また扉とが一つありました。そしてそのわきに鏡がかゝつて、その下には長い柄のついたブラシが置いてあつたのです。

扉には赤い字で、「お客さまがた、こゝで髪をきちんとして、それから はきものの泥を落してください。」と書いてありました。

「これはどうも尤(もつと)もだ。僕もさつき玄関で、山のなかだとおもつて見くびつたんだよ」

「作法の厳しい家(うち)だ。きつとよほど偉い人たちが、たびたび来るんだ。」

そこで二人は、きれいに髪をけづつて、靴の泥を落しました。

そしたら、どうです。ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうつとかすんで無くなつて、風がどうつと室(へや)の中に入つてきました。

二人はびつくりして、互によりそつて、扉をがたんと開けて、次の室(へや)へ入つて行きました。

扉の内側に、また変なことが書いてありました。

「鉄砲と弾丸(たま)をこゝへ置いてください。」

見るとすぐ横に黒い台がありました。

「なるほど。いや、よほど偉いひとが始終(しじゅう)来てゐるんだ。」

二人は鉄砲をはづし、それを台の上に置きました。

また黒い扉がありました。

「どうか帽子と外套と靴をおとり下さい。」
「仕方ない、とらう。たしかによつぽどえらいひとなんだ。奥に来てゐるのは」
二人は帽子とオーバコートを釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはひりました。
扉の裏側には、
「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、
ことに尖つたものは、みんなこゝに置いてください」
と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちやんと口を開けて置いてありました。
「はゝあ、何かの料理に電気をつかふと見えるね。金気のものはあぶないと斯う云ふんだらう。」
「さうだらう。して見ると勘定は帰りにこゝで払ふのだらうか。」
「どうもさうらしい。」
二人はめがねをはづしたり、カフスボタンをとつたり、みんな金庫の中に入れて、ぱちんと錠をかけました。
すこし行きますとまた扉とがあつて、その前に硝子の壺が一つありました。扉には斯う書いてありました。
「壺のなかのクリームを顔や手足にすつかり塗つてください。」
みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。
「クリームをぬれといふのはどういふんだ。」
「これはね、外がひじやうに寒いだらう。室のなかがあんまり暖いとひびがきれるから、その予防なんだ。」

二人は壺のクリームを、顔に塗つて手に塗つてそれから靴下をぬいで足に塗りました。それから大急ぎで扉をあけますと、扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「料理はもうすぐできます。
十五分とお待たせはいたしません。
すぐたべられます。
いろいろ注文が多くてうるさかつたでせう。お気の毒でした。
もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさんよくもみ込んでください。」

こんどといふこんどは二人ともぎよつとしてお互(たがい)にクリームをたくさん塗つた顔を見合せました。

「どうもをかしいぜ。」
「ぼくもをかしいとおもふ。」
「沢山の注文といふのは、向ふがこつちへ注文してるんだよ。」
「だからさ、西洋料理店といふのは、ぼくの考へるところでは、西洋料理を、来た人にたべさせるのではなくて」

「来た人を西洋料理にして、食べてやる家(うち)とかういふことなんだ。これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」
がたがたがたがた、ふるへだしてもうものが言へませんでした。一人の紳士はうしろの戸を押さうとしましたが、どうです、戸はもう一分(いちぶ)も動きませんでした。

奥の方にはまだ一枚扉があつて、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあつて、
「いや、わざわざご苦労です。
大へん結構にできました。
さあさあおなかにおはひりください。」
と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉(めだま)がこつちをのぞいてゐます。

「うわあ。」がたがたがたがた。
ふたりは泣き出しました。
すると
「お客さん方、早くいらつしやい。いらつしやい。お皿さらも洗つてありますし、菜つ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜つ葉をうまくとりあはせて、まつ白なお皿にのせる丈(だけ)です。それともサラドはお嫌ひですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげませうか。とにかくはやくいらつしやい。」
二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしやくしやの紙屑(かみくず)のやうになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるへ、声もなく泣きました。
「いらつしやい、いらつしやい。そんなに泣いては折角のクリームが流れるぢやありませんか。へい、たゞいま。」
「早くいらつしやい。もうナフキンをかけて、ナイフをもつて、舌なめずりして、お客さま方を待つてゐます。」
二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。
そのときうしろからいきなり、
「わん、わん、ぐわあ。」といふ声がして、あの白熊(しろくま)のやうな犬が二疋(にひき)、扉とをつきやぶつて室(へや)の中に飛び込んできました。鍵穴(かぎあな)の眼玉はたちまちなくなり、戸はがたりとひらき、犬どもは吸ひ込まれるやうに飛んで行きました。
その扉の向ふのまつくらやみのなかで、
「にやあお、くわあ、ごろごろ。」といふ声がして、それからがさがさ鳴りました。
室はけむりのやうに消え、二人は寒さにぶるぶるふるへて、草の中に立つてゐました。
風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴りました。

犬がふうとうなつて戻つてきました。
そしてうしろからは、
「旦那(だんな)あ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。
二人は俄(にはか)に元気がついて
「おゝい、おゝい、こゝだぞ、早く来い。」と叫びました。
簑帽子(みのばうし)をかぶつた専門の猟師が、草をざわざわ分けてやつてきました。
そこで二人はやつと安心しました。
そして猟師のもつてきた団子をたべ、東京に帰りました。
しかし、さつき一ぺん紙くづのやうになつた二人の顔だけは、東京に帰つても、お湯にはひつても、もうもとのとほりになほりませんでした。

※原作より一部、studio_o3が朗読用に構成しています。

底本：「宮沢賢治全集8」ちくま文庫、筑摩書房
1986(昭和61)年1月28日第1刷発行
初出：「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」
盛岡市杜陵出版部・東京光原社
1924(大正13)年12月1日